

第22回「日韓高校生交流キャンプ」参加生徒の感想文 ①

「慎始敬終」

青木 勇斗

早稲田大学本庄高等学院 3年



私はこのキャンプに参加する際に、一つのテーマを決めてキャンプに臨もうと決めました。元々私がこのキャンプに応募した動機は韓国に興味があったからとかではなく、ビジネスプランを考えるというプログラム内容と且つ、国際交流ができるという点でした。倍率がとても高いと聞いていたので合格のお知らせが来たときに、行くからには何事にも妥協せずやりきろうと思い、テーマを「慎始敬終」にしました。

そしてテーマを掲げ臨んだキャンプ当日。日本を発ち、金浦空港に到着した時から躍動する胸の鼓動と、高鳴る高揚感を抑えきれずにはいられなかったのを今でも覚えています。しかし、期待と同時に不安があったのも事実です。意思疎通はできるのだろうか。しっかりと会話できるだろうか。という不安が募っていきました。が、ホテルに到着し韓国の学生と対面すると、やはりどの現場でもある通り実際に会い、接してみるとそれらの心配は杞憂であったと確信しました。

初日は主に、チーム名決めと友達作り。私たちのチームはチーム1なので『WE ARE THE ONE』というシンプルなチーム名にしました。意思疎通も予想していたよりは出来たのでとても楽しい一日目を過ごすことができました。

二日目。二日目は事業種別に現場体験を行いました。私は飲食だったため「seven springs」さんを訪問し、飲食業についての講義や調理実習、接客の講習などを受けました。中でも調理実習が印象に残っていて、韓国の伝統料理を作りました。簡単な調理でしたが、協力して作ったのでとても楽しかったです。

そのあとはチームTシャツを探しにユニクロへ行き、街中を少し散策しました。物価は日本より安いだろうと思っていましたがそんなことはありませんでした。観光客がたくさん訪れる土地なので割高なのを考慮しても高いと思わざるをえない品もちらほらあり、驚きの連続でした。韓国のセブンイレブンにも寄りました。目に映るもの

はもちろん初見のものばかりなので、どれも美味しそうに見え興奮しました。

ホテルに戻るとゴールデンベルという勝ち抜き式のクイズ大会。ペアの子と頑張りましたが惜しくも最後まで残れませんでした。

そして楽しい時間が終わるとここからは真面目な時間。四日目の模擬投資に向けて事業案作成を開始しました。コンセプトを決めるのに日本側と韓国側の意見が分かれてしまうことがありましたが時間を費やし、何とかコンセプトを考えることができました。

三日目を迎えました。先輩方からもこの三日目が一番つらいと聞いていたので気合を入れて作業に臨みました。具体的にはコンセプトをより具体的なものにし、可視化する。さらに4P戦略、SWOT分析を考え、模擬投資に向けて自分のブースを飾り付けていく作業をしました。

丸一日あるので終わるだろうと思っていましたが、全く終わる気配がなく意気消沈しそうになることも多々ありました。ですが、最初に掲げた「慎始敬終」を思い出し、自らを奮い立たせました。そして夜中の三時近くによく準備を終えることができました。

そして迎えた運命の四日目。最初は投資者の足取りもあまりなく、不安でしたがチームメイトと協力しながらたくさんの投資金を集めることに成功しました。もちろん私たちが狙うのは最優秀賞。期待を募らせ

ながら表彰式に臨みました。人気賞、チームワーク賞が発表され、向かえた優秀賞の発表。私たちのチーム名が呼ばれました。嬉しさもある反面、悔しさもありました。けれど皆で協力して勝ち取ることができた賞なので、誇りに思おう。胸を張ろう、そう決めました。

表彰式が終わりご飯を食べ、両国の学生がステージで特技を発表したり、伝統的な遊びをしました。私は代表で韓国の伝統衣装の「チマチョゴリ」を着させていただきました。貴重な体験ができて本当に嬉しかったです。この日の夜は皆で同じ部屋に集まり遅くまで談笑していました。この楽しい時間が終わってしまうという悲しさが現実味を帯びてきた頃でもありました。

そして迎えた最終日。私たちは仁寺洞へ行き韓国の伝統工芸品を作りました。その後、韓国での最後の昼食をとり、ついに別れの時が来ました。

私はどんなに感動する映画を見ても泣くことができずここ数年涙を流していませんでした。なので、別れの時でも泣かない。いや、泣けない。そう思っていました。けれど、予想とは反してみんなが一人ずつ話すのを見て自然と涙が出てきました。別れてこんなに辛いものなのかと思うほど涙がこみ上げてきました。それと同時に最初に掲げた「慎始敬終」を自分なりに達成することができた達成感からも涙がこみ上げてきたんだと思います。絶対にまた再会する。そう決意し、私たちは別れました。

今回のキャンプで得たものは将来、人生の糧となるものばかりで一言では語りつくせません。私の世界観を大きくしてくれたキャンプだったと思います。このような機会を設けてくださった方々に本当に感謝し

ます。ありがとうございました。

これからもメンバーとは連絡を取り、日韓交友関係に少しでも貢献できるような活動をしていきたいと思っています。

「宝物」



中本 千晶
立命館宇治高等学校 1年

私がこのキャンプに参加したのにはいくつかの理由があります。一つはK-POPが大好きで韓国に行きたかったから。もう一つは自分の韓国語の能力を知りたかったから。そして、韓国の高校生と話をしてみたかったからです。

初日、私は朝早くから祖母の家を出発し、新幹線に乗り込み、なんとか空港に着くことができました。最初は気まずくて、なかなか話しかけられなかった関東圏の子達とも韓国に着く頃には打ち解けることができましたと思います。

会場に着くと、韓国の高校生達が大きな歓声で迎えてくれました。しかし、いざ話してみようとするとなかなか目も合わせてくれず、気まずい雰囲気が続きました。

1日目はなんとか英語でコミュニケーションをとりながら過ごしましたが、まだま

だお互いのことを分かり合えていなかったように思います。

二日目には、グループで「ロッテホテル」に行きました。バスの中でゲームをするうちに打ち解けてきて、すごく楽しい時間を過ごすことができたと思います。私も、せっかく韓国にきているのだから韓国語で話そうと、一生懸命韓国語で話しかけてみました。すると、少しずつ会話がはずみ、冗談をいいあったりして、笑顔も増えてきました。

ホテルに帰ってくると、昼間にロッテホテルでみたことを参考に夜遅くまで意見を交わしました。部屋に戻ると、オンニ達が昼間にロッテマートで買った夜食を取り出し始め、韓国で一番辛い焼きそばをみんなで涙目になりながら食べました。日本に帰

ってきた今はそれさえもかけがえのない思い出です。

三日目は、発表に向けてまた話し合いを重ね、ブース作りに励みました。時々メンターさんが居なくなって言葉が通じず、困ることも多々ありましたが、幸い韓国人の一人に日本語が上手なオンニがいたので助け合うことができました。

この楽しくも大変な時間を共にやり抜いたことでまた私たちの距離が縮まったと思います。

四日目はついに発表の日でした。朝早くに会場にいてその場で詰め込んだ言葉だったのでうまく説明できるか不安でした。みんなで「大丈夫」「頑張ろう」と声を掛け合いながら始まるのを待ちました。いざ始まると、緊張も解けて自分でもびっくりするくらい大きな声で自分のチームを宣伝していました。

残念ながら私たちのチームは賞をいただけなかったけれど、一生懸命に準備して、強めた絆はナンバーワンだと思います。

五日目は、仁寺洞へ行くことができました。でも、お別れが近づいていると思うだ

けで悲しくなり、あまり楽しめなかったような気がします。伝統工芸品を作り、お昼を食べる時間にはたくさん写真を撮りました。「今度はいつ会おう」そんな話もしました。最後に、韓国の子達が日本の子達にお土産をくれました。それが本当に嬉しくて、余計に離れたくないという気持ちを強めました。

しかし、とうとうお別れの時がきました。普段はともしっかりしている日本人の女の子が最初に泣き始めました。それにつられて、私も涙を流しました。ずっとみんなといられたらいいのに。このまま楽しい時間を過ごせたらいいのに。そう思えば思うほど涙が止まらなくなりました。みんな優しく私を抱きしめて、「また会えるから」と言ってくれました。

キャンプが終わっても私たちは連絡を取り合っています。夜遅くまでスカイプでお互いのことを毎日のように話し合っています。そんなかけがえのない友人ができたキャンプでした。その友人は私にとって宝物です。その宝物はきっと他の場所では見つけることはできません。この先もずっとずっと輝き続ける宝物です。

「人生の羅針盤」



鈴木 伶央

慶應義塾湘南藤沢高等部 2年

このキャンプに参加するまで自分は正直韓国のことが好きになれなかった。

初めて僕が韓国人と関わったのは小学四年生の時、父の仕事の都合でパナマという国のインターナショナルスクールに通っていた時だった。様々な人種の子供たちが通っていたのだが日本人は自分以外誰もいない、日本語をしゃべれる人もいない、自分はというとアルファベットもろくに覚えていない。そんな状態で入学したので友達がなかなかできずに半年が過ぎていた。そんな時その韓国人は転校してきた。その当時は黒い髪の毛の子が転校してきただけで親近感が芽生え嬉しくて仕方がなかった。その学校にはアジア人だけ異様に少なかったのだ。

その子も英語ができないのでしばらく二人で英語の基礎授業を受けることになったがその子の上達速度には目を見張るものがあった。自分もその子の影響を受け、負けないように、英語を必至で頑張った。すると卒業するころには英語力だけではなく積極性も養われていて、しかもオランダ人の親友と呼べる人までできた。これもその韓国人の友達とよいライバル関係になっていたからだと思う。アジア人同士なので価値観が合うしお互いサッカー好きなのでその

子とも仲が良かった。だから少年期は韓国に対して悪いイメージを持ったことが一度もなかった

ただ帰国して日本で生活しているうちに考え方が変わっていった。ニュースでは連日のように韓国との政治的問題が報道されていたし、歴史関係で韓国について習うことという領土問題と歴史認識の違いについてだけだった。ネットでも嫌韓派が書いたと思われる記事を毎日のように見た。こんな状況で韓国を好きになれる訳がない。だからいつの間にか嫌韓派になっている自分がいた。

ただある日、学校でこのキャンプの張り紙を見たときにある疑問が頭をよぎった。一回も韓国に行ったことがないのに果たしてこの様な偏見を持ってよいのだろうか。百聞は一見に如かずという言葉がある、せめて一回くらいは自分の目で現状を確認したい。僕は応募用紙を出した。

7月27日、羽田に着くとすでにほとんどの日本人が集まっていた。出発までの時間話題はずっと韓国について、聞けばほとんどの人が韓国の文化に興味を持っていた。韓国の文化について知っていることがほとんどなかったので急に不安になった。が、

東京とソウルは近い。時間は焦る僕を待ってくれるはずもなく気が付くとホテルのロビーの前、いよいよ対面だ。

温かい拍手と歓声に迎えられて余計に緊張した。最初の自己紹介はぎこちなくて気まずかった。その後に夕食、席の関係で男女バラバラになってしまい最初の食事は男四人で食べることとなったが、幸いなことにこのグループの男子全員が、海外での生活の経験などがあったりして英語で普通に会話できた。そしてその晩は韓国のホラー漫画を一緒に見たり、スマホのゲームで対戦したりして、まるで何年も付き合っている友達のように遊んだ。この一晩で僕らは完全に打ち解けあった。

翌日ホラーの見過ぎであまり眠れなかったが（笑）この日は事業案の決定の日、自分の考えがちゃんと伝わるのか少し不安だったがそんな心配はいらなかった。というのもチーム5のメンターさんは日本語がものすごく上手くそして統率力のある人だったからだ。海外生活で様々な外国人と話したことがあるがその中でも彼女の日本語は頭一つ飛びぬけて上手かった。そんな人が通訳してくださったので内容の濃い議論ができた。その分時間内に決まらず夜中にもう一度集まって話したがそれも結果的にチームの絆と理解を深めることになったんじゃないかなと思う。結局事業案が決まったのは三日目の朝だった。

僕らの事業内容は世界中の食べ物が楽しめるフードチェーンを作るという飲食サービス関係のものだった。僕はまずその店の

模型を作る仕事をやった。友達が手伝ってくれたので数時間で形になった。そのあとはCM作り、学校で動画編集を習ったことがあったので自分から役を買って出たが、なかなか思うように進まない。周りを見るとチームのみんなはそれぞれの仕事を着実に進めていて、一時は自分だけ何にも貢献できないんじゃないかとさえ思った。焦っても焦っても結果は変わらず、結局メンターさんとOBのお二人に手伝ってもらって模擬投資の10分前になんとか完成した。

僕がキャンプに参加した理由の一つに百聞は一見に如かずという言葉に影響を受けたということがある。実はその言葉には続きがある。百見は一考に如かず、百考は一行に如かず。百行は一果に如かず…。僕たちの班は一果までたどり着くことができた。人気賞という結果を出せたからだ。勿論、賞が全てというわけではない。でも発表の時に自分達のチーム名が聞こえた時はなんと表現したらよいのだろうか、とにかく嬉しくて仕方がなかった。

最後の夜、メンターさんの提案で明け方近くまでみんなで話し合った。くだらない内容がほとんどだったが本当に楽しかった。

別れの時はその実感がなくて泣けなかったが、日本でバスで一人だけになると自然と涙が出た。

以前は韓国のことを一方的に嫌っていたが、今は違う。勿論、全ての日本人、韓国人が今回のキャンプの参加者のように互いを尊重しているわけではない、でも、だか

からこそ、僕らの様に互いの国を理解して尊重できる一部の人間が次の世代の二国の関係を変えることができる。

キャンプ後、今の自分にはそんな責任感が残っている。僕が変えなくて誰がやるんだと。そして残っているのは責任感だけではない。もう二つある。国と数多の困難を超えて得た掛け替えのない友達と「人生の羅針盤」だ。この先、日本人として国際社会という大海原に出ることになる。文化、言葉、価値観の違う人間と出会うことにな

る。そんな状況でパナマから帰国した過去の自分のように、自分を見失わないように今回の経験を人生の羅針盤として、国際人としての自分の原点として役立てていきたい。

規定量オーバーもいいところですが最後に一言いわせてください。

チーム5のみんな！本当にありがとう！！

